



TELLING THE WOMEN'S STORY

監督・河瀬直美が映像美で描く女の物語。

2011年にスタートしたMIU MIUのショートフィルムプロジェクト「MIU MIU WOMEN'S TALES」。「女性たちの物語」をテーマに、これまで世界的に活躍する女性監督たちが独自の物語を紡いできた。そして11回目を迎えた今年、日本人として初めて河瀬直美がこのプロジェクトに参加。「SEED」と題された気づきと目覚めの物語とは？

Text: Rieko Shibasaki Editor: Shizue Hamano



カンヌ国際映画祭で複数の受賞歴を持つ唯一の日本人監督、河瀬直美がアジア圏で初めて、MIU MIUの「MIU MIU WOMENS TALKS（女性たちの物語）」のために短編作品「SEED」を撮り下ろした。河瀬監督といえは、独特の視点で捉えたストーリーを圧巻の映像美で包み込むことで、それまで見えなかった新しい何かを発見させてくれる監督。今回の「SEED」では、その「気づき」や「発見」がより研ぎ澄まされた形で語られている。

一人の少女が大自然に触れ、新しい物事やさまざまな人と出会い、目覚め、成長していく。サカナクションが手がける心地いいサウンドに乗り、主演の安藤サクラが不思議な魅力で放つ本作において、河瀬監督が本当に伝えたかったことは一体なんだったのだろうか。

——まずは、今回のプロジェクトの作品作りにおける、発想の出発点から教えてください。

MIU MIUのイタリア本社から、監督をお願いしたいという連絡をいただいた際に、ショートフィルムであること、そして女性たちの物語であるというお話を伺いました。その女性たちの物語にはこだわらなければならない、その他の映像制作に関しては私の好きなように自由に撮ってもらって構わないと。その話を受けて、MIU MIUの2015年春夏コレクションを見せていただいたのですが、コレクションには赤や黄色、緑といった、印象的なヴィヴィッドカラーが使われていた。そういう素敵な服の色使いに負けない日本の美という意味で、紅葉をイメージしたのが物語の出発点です。そのため、紅葉が

一番美しい季節に撮影ができるように準備を始めました。

——タイトル「SEED」というのはどのタイミングで決定したのでしょうか？

タイトルは最初から決まっていた。種というのはあらゆる生命力の源であり、その生命力が今作の力でもありましたので。また、その種が芽を出し、どう育っていくのかということをいろいろと想像したときに、少女の成長と照らし合わせるのがしっくりくるなということ、今回のようなストーリーになりました。

——監督の作品はどちらかというと、男女という性を強調する作品ではないと思うのですが、今作で特に意識されたことは？

確かにこれまで全面的に「女性性」を押し出した作品を作ったことがありませんでしたので、そこががえって面白いなと思いました。ただ今回はキャラクター、つまり主演の安藤サクラさんの生命力や、彼女の力強さというのとは掘っているときに自然と出てくるだろうなというのがわかっていたので、私のほうから意識的に強く「女性性」を主張するようなことはありませんでした。

——その主演の安藤サクラさんはどのようにして参加が決まったのでしょうか？

主人公は少女というが、無垢な細胞が増殖していくような躍動感のある女性像がパツと浮かび上がったので、それには以前から一緒に働きたいと思っていた安藤サクラさんがぴったりじゃないかと思ひ、彼女に声をかけさせていたんだんです。そして、彼女が現場に来てなにを感じるかというのを、即興的な感覚でカメラに収め

“MIU MIUのコレクションに負けない日本の美としてイメージした紅葉が始まり。”



撮影は昨秋、奈良と東京で行われた。奈良の雄大な自然と街が一望できる若草山（右ページ上）と、東京の都心を行き交う人の姿（右ページ下）のコントラストが印象的。「奈良は土地の記憶や自然そのものが息づいている場所」。安藤サクラはその大地で「この世界に存在する木が風に揺らぐような、あるいは海が風を受けて揺立つようなナチュラルな動き」を表現し、風景と一つになった。

ていくスタンスを取りました。

——安藤サクラさんの魅力は？

非常に生々しいところですね。水だったら本当に水に入っているてしまう人だし、風が吹くと本当に走って行ってしまったりする。すごく「生」を感じる女優さんだと思います。

——監督は、カメラの回っていないところでも役者さんたちに登場人物になりきってもらった演出法を取っているそうですが、今回も同様の演出をされたんですか？

安藤さんが少年やおじさんたちと対話する箇所、なにかを「交換」するところだけはあらかじめ決めてありましたが、それ以外は本当に自由にやってもらいました。たとえば若草山という山の上の、奈良を一望できる広場で走ったり踊ったりしているのは、サクラさんの自由な演技です。ですから、「用意スタート」という感じはありつつも、その中で感じるままに動いてもらったというイメージですね。

——今「交換」とおっしゃいましたが、台詞がほとんどない映像の

中で、安藤さんが演じる女性が口にする「交換」という言葉がとても心に響いてきます。あの言葉にこめた思いは？

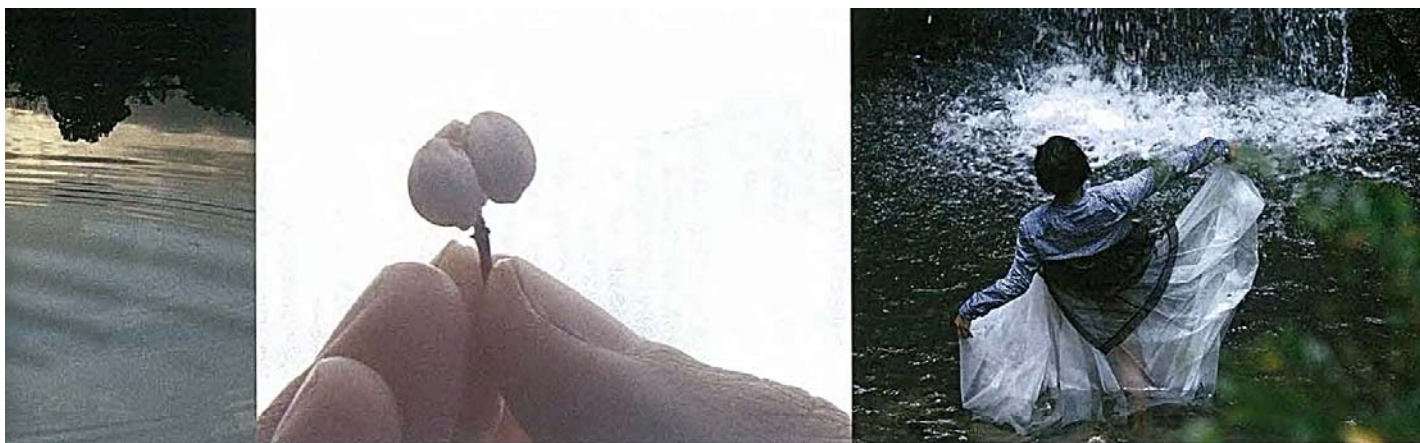
なにかを交換するというのは、相手のことを受け止めて自分の中に新しいものを存在させるという象徴でもあるんです。今の社会はどちらかというと自分と違うものを受け入れるのではなく、排除していくという風潮があるように思うので、お互いに違いを認め合ったり、知らないことを自分の中で存在させることが実は自分自身の幅を広げることなんだよと伝えるとき、今作では、それによって生まれるより豊かな女性像を表現したつもりです。

——思い描いた「面白い状態に自然がマツチしてくれた」。

——今作は「奈良」という場所が、物語のもう一方の主人公になっていますよね。

撮影場所に関しては、実は東京でもいかなと思っていたんです。——そうなんですか？ 意外です。

スケジュールがタイトだったので、奈良にこだわらずにというのが正直なところで、そのへんは臨機応変に思っていました。ところが去年は紅葉が予定よりも早く、関西で紅葉の終わりがけのいいタイミングで撮影することができました。もし関西で紅葉が間に合わなかったら、東京で撮っていたと思います。ただ、奈良でしたら私が生まれ育った時間の中で「ここ」という綺麗に撮れる場所をわかってるので、そういうところをしっかりと入れていけば映像の美しさは表現できるな思っていました。なので、当初思い描いてい



“知らなかったものを自分の中で存在させることが、自分自身の幅を広げてくれる。”

た一番いい状態で撮影ができたのはとてもラッキーでした。ロケーションというよりも、自然の状態がうまくハマってくれたという感じです。

——安藤さんが劇中で着用している服も、奈良の自然の風景に溶けこみつつ、観ている人の記憶に印象づける素敵なおしゃれですね。

物語に着想した当初から、漠然と主人公の無垢さを表現するのに白っぽいものがいいなと思っていました。コレクションに登場するカラフルな服は奈良の紅葉で表現できますので、衣装として纏う必要はないと感じ、風に揺れる軽やかなチュールのスカートを選びました。ナチュラルで柔らかな感じも気に入っています。衣装に関しては、はつきりとしたイメージが浮かんでいましたので、比較的スムーズに決まったと思います。

——河瀬さんご自身はどんなファッションがお好きなのですか？

子どもを出産してから、デザインよりも素材にこだわることが多くなりました。自分が誰かに抱きしめられているときに感じる、肌触りのよさってありますよね。その肌触りを重視した自然素材を使った服に、だんだん好みが変わっていった。若いうちは色合いだったり、奇抜なデザインに惹かれて洋服を選ぶことも多々ありましたが、最近は機能的で、優しいアイスカラーが中心という感じです。また3〜4年前から畑をやっているのも、つなぎを愛用しています。つなぎは楽だし、一番ですよ(笑)。

表現の幅が広がる気がしてとても楽しいんです。

——『SEED』は約10分という短編ですが、短い映像と最小限の

言葉で表現を明確にすることの難しさというのはありましたか？

最近では韓国からの依頼でショートムービーを作ったり、諸外国から映像製作を依頼されることが増えているんです。長編だと膨大な時間がかかってしまうのですが、30分以内のショートフィルムの場合、長編と比較してですが、短時間で自分の信頼するスタッフたちと小回りをきかせながら、深く、奥の奥まで掘っていくことができています。もちろんその場合はクライアントの求める世界にコミットする難しさというのがあるんですけど、自分の中ではそういうすべてを楽しんでいるんです。今回の場合は安藤サクラさんとの出会いもそうなんです。サカナクションの音楽とも新しいコラボレーションができた。それはこういう機会を与えてくれたからこそだと思います。やはり自分一人ではやるよりも表現の幅がどんどん広がっていく感じがして、それがとても楽しいんです。

——今回音楽を手がけているリカナクションとのコラボは、どのようにして実現したのですか？

もともと私はサカナクションの音楽が好きで、ライブに行ったりしていたんです。そんなある日、ライブが終わってから彼らとお話しする機会があった。そこから個人的に山口さんとやり取りするようになり、「いつか一緒に仕事をしたいね」という話をしていたんです。

——軽快で澄んだサウンドが映像にぴったりとマッチしていて、言葉が少なく映像の中で音楽が語りかけてくれるようなシーンもたびたびありました。

そうですね。サカナクション

Naomi Kawase

河瀬直美

奈良県出身。1997年に『朝の朱雀(もえのすざく)』でカンヌ国際映画祭カメラ・ドール(新人監督賞)を史上最年少受賞。2007年には『裸(むがり)の森』でカンヌ国際映画祭グランプリを獲得。また、2013年には同映画祭では日本人監督初の審査員を務めている。2015年フランス芸術文化勲章「シュヴァリエ」を受勲。最新作『あん』は大ヒットを記録。TV・DVDが発売中。Twitter: @KawaseNAOMI

『SEED』

舞台は奈良と東京の新宿。一人の少女(安藤サクラ)が、人生の旅の中でワイルドな自然と戯れ、そこで出会ったさまざまな人や物事とのかを交換をすることで新しい感情に気づき、目覚め、日の当たる場所を目指していく。





“奈良の大地のように、いろんなものを吸収して存在させる器でありたい。”

「バクマン」の音楽も手がけていて、実際に私も映画館で作品を観たときに、彼らの音がすごく心に響いたんです。ほかにもバリコレの音楽などもやっていて、普段のサカナクションとしてのパフォーマンスだけでなく、音楽というものを中心に表現をしている本当のアーティストなんですよ。おそらく、「河瀬直美はこんな映画」とカテゴライズされた場合、それとサカナクションというのは相まみえない感じがすると思うんです。ですから、私のほうはサカナクションのテンポを鑑みながら、編集タイミングをいつもよりもスマートにしたり、カメラを早回しにして上下を逆さにしたりして、普段はやらない映像表現を試みた。1人では出来ない表現の幅を、ここでも楽しめたことが私にとってはとても新鮮でした。

——確かに映像からも作り手の楽しさが伝わってきます。

撮影のときは新宿のと真ん中で自由に歌ったり踊ったりして、本当に楽しかったですね。それから「これはありえないだろう」ということでは、万葉集にも詠われた奈良の三笠山の前にあるお堂にサカナクションがやってきて、そこでの生演奏を楽曲にしたんです。なかなかない贅沢なシチュエーションだったので、誰にも見せられないのがとても残念でした。

千年先の誰かに届けられるそんな映像作りがしたい。

——本作は安藤サクラさんが演じる女性が、さまざまな感情に気づきながら光のあたる場所へとたどりつく物語ですが、河瀬監督にとって「光のあたる場所」、最終的に自分が「たどりつきたい」場所

はどこなのでしょう？

映画監督としては、「なんで映画を作っているんですか？」と問われたときに、「今だけでなく千年先の人たちに届けられる物語を語りたい」というのがすべてなんです。その感覚は、千年前のものが今も普通に存在している奈良で暮らしているからこそ、感じることでできるものだと思います。それは昔のものを、現代の私たちも見ることが出来る……。その時間の蓄積の大きさというものを、常々感じていますから。人が一生でできることには限りがあるけれど、千年先の誰かに届けられるなにかもあるということを感じて、アルに体験しているの、そういう映像を作っていたらなと思っています。また、奈良は土地の記憶を持っている場所なので、私も一人の人間としてここで生き、大地のように自分の中にいろんなものを吸収し、存在させるような器でありたいなと思います。

——奈良という場所生まれ育ったことが、河瀬監督の唯一無二の美意識を形成したんですね。

たとえば「SEED」の最後に登場する銀杏の木が黄色い葉をつけ、それがチラチラと揺れ落ちる中で、安藤さんが光に向かって「生まれる」「始まる」と口にすると、シーンがありますよね。あの銀杏の葉はその後散り、春に芽吹いてまた同じように美しい光のもとで葉を色づかせていく。そのなげないさやかな時間がゆっくりと少しずつたまって歴史になっていく。奈良は、そういう始まりや終わりがないかのような、永遠の流るが未来へと続いていく、永遠の流るを肌で感じとれる場所なんです。

The Story Behind

安藤サクラが語る『SEED』と河瀬直美

本作では具体的に「こういう少女」という人物像がなかったのですが、自分たちが今いるところの一つのエネルギーの塊のような生き物であれたいなという思いで、ニュートラルな状態で演じました。最初の撮影場所だった奈良で、偶然逆さまに水を覗きこんでみたら、河瀬監督がそれを撮っていたんです。その姿を見て、「これからは全部逆さまに見よう」と。それが少女の物の見方となり、ほか

の動きもそれに合っていくような不思議な物語でした。

河瀬監督とは言葉を使って深く交流をしたわけではないのですが、それこそ最初の段階から「一緒に宇宙に行ったことがあったっけ？」と思ってしまうような特別な感覚がありました。知らないうちに監督に体も頭の中も動かされているような、そして何も話さなくても何か伝わるような、その感じがとても楽しかったです。



Photos: Courtesy of Kyou Mu (Japan), Utsa Kose (Korea)

Re: TELLING THE WOMEN'S STORY

Source: VOGUE Japan

Issue: May 2016

By: Text: Ms. Rieko Shibasaki Editor: Ms. Shizue Hamano

1.

The MIU MIU short film project “MIU MIU WOMEN’S TALES” began in 2011. Embracing the theme of a story about women, female directors who are active in the global scene have woven unique tales to date. And this year, the 11th year of the initiative, Naomi Kawase became the first Japanese participant in the project. What is this story about people’s awareness and awakenings under the title, “SEED”?

2.

Q: If we had to say, I don’t think your work tends to emphasize a male or female gender. What were you consciously aware of with this work?

It’s true that I haven’t made anything in the past that puts particular emphasis on the female gender and that was something which had been rather interesting. But with this work, I knew that the strength of the sense of the life force of the character, the leading actress Sakura Ando, that is, would come out naturally, I didn’t intentionally emphasize (the) female (gender).

Q: What led to the participation of Sakura Ando as the lead?

An image came to me of a girl—a woman—who was innocent, who had a sense of action like the cells (of her body) were multiplying, and I thought Ms. Sakura Ando, a person who I had wanted to work with, would be perfect for that, so I approached her. And I took the approach of capturing with the camera in an improvised sense the things that she would feel when she came to the site.

Q: What are the appeals of Ms. Sakura Ando?

She’s very vivid. When it comes to water she’d really go into the water and if you had a wind blowing she’d really go away running. I think she’s an actress who gives you a very strong sense of life.

Q: I understand you direct by having your actors become their characters even when the camera isn’t rolling. Is that how you directed on this occasion, too?

I had decided in advance the parts where Ms. Ando holds dialogues with the boy and the men, where she exchanges things with them, but other than that, I had her act very freely. For example, her running and dancing at the top of Mount Wakakusa, where you can get a full view of Nara, was her own, free initiative. So although we had the sense of “ready –action”, the concept was that I had her move in whatever way she felt.

Q: You just mentioned “exchanges” (in the film). In the visuals where there are very few lines, the word “exchange” that the character played by Ms. Ando says makes a very strong impression on us. What were the feelings that went into that word?

The exchange of something also symbolizes accepting the other person and allowing something new to exist within ourselves.

I think in today’s society there’s a tendency to remove something that’s different from us rather than accepting it so it’s being able to say that accepting our differences and allowing something that we didn’t know to exist within us is really an act of broadening ourselves and I tried to express a richer image of a woman that is born from these sorts of actions.

3.

“What had been the starting point for the story were my images of autumn leaves, a sense of the beauty of Japan that wouldn’t be inferior to the MIU MIU collection.”

4.

(caption)

The filming took place last autumn in Nara and Tokyo. An impressive contrast is made between Mount Wakakusa (top of right page), which offers a panoramic view of the magnificent nature and the city, and the waves of people coming and going in Tokyo’s Shinjuku (bottom of right page). “Nara is a place where memories of the land and nature itself is alive.” It was on such lands that Sakura Ando expressed “natural movements like a tree that exists in this world swaying in the wind or waves forming on the sea due to the wind” and became one with the scenery.

5.

Nature went ahead and provided a match to the best state that I had envisioned

Q: The location Nara has become the other leading character of the story, hasn’t it?

I had actually been thinking that Tokyo would have been all right as the site for filming.

Q: Really? That’s a surprise.

We were on a tight schedule and we wouldn't have gotten it done on time if we were too impartial to Nara so I tried to be flexible about that. But last year, the autumn leaves appeared earlier than scheduled and we were able to shoot at a good time toward the end of the autumn leaves in Kansai. I think we would have filmed in Tokyo if we weren't there on time for the autumn leaves. But with Nara, I know the places where we can shoot beautifully from the time I grew up (there) so thought we'd be able to express the beauty of imagery if we could insert those aspects in a solid way. So we were very lucky to have been able to film under the best conditions as I'd initially envisioned. It's more like the state of nature fit nicely rather than the location.

Q: The wardrobes worn by Ms. Ando in the work is also a fine selection, blending into the scenes of nature in Nara and at the same time leaving an impression in the memories of viewers.

From the initial conception of the story, I had been thinking that whitish items would be good for vaguely expressing the innocence of the heroine. Colorful clothes that appear in the collection can be expressed with the autumn leaves in Nara so I felt that there wasn't a need to have them worn as wardrobe and I chose a light tulle skirt that would sway in the wind. I also like the way it's natural and gives a soft impression. I had a clear image in mind for wardrobes so I think things went relatively smoothly.

Q: What types of fashions do you yourself like?

Since having my baby, I've started to be partial more to the materials than the designs. There's the nice feel of texture when you're being held by someone, isn't there? I think my taste has gradually been shifting to clothes that use natural materials that focus on that texture. When I was young, I used to often select clothes where I was attracted to the colors or the novel designs but recently, (my selections are) mostly functional and in gentle earth colors. I've had a field since three or four years ago so I often wear overalls. They're comfortable, and they're the best (laugh).

6.

It's a lot of fun; I feel like my scope of expressions is expanding.

Q: SEED is a short work that's about ten minutes long. Were there challenges in making clear expressions in a short work with a minimum of words?

I'm recently receiving more requests from various countries abroad to produce visual work, like a request from South Korea to create a short movie. Whereas a full-length feature would

require enormous amounts of time, in the case of a short film that's less than 30 minutes in length, compared to a feature film, it's possible to work in an agile way with staff that you trust to shoot good, deep content in a short amount of time. Of course, then there's the difficulty of committing to the world that the client is after, but I'm able to enjoy all of these things within myself. With this particular work, the same thing can be said for my encounter with Ms. Sakura Ando, but I was able to do a new collaboration with Sakanaction's music. I think it's because I was given this type of opportunity that that became possible. I feel that the scope of expressions expands more and more compared to doing something alone and that's what's been a lot of fun.

Q: What prompted your collaboration with Sakanaction, who provided the music?

I liked Sakanaction's music to begin with and I used to go to their live performances. And it was one of those times when I had the opportunity to talk with them after their performance. I started communicating personally with Yamaguchi-san from there and we used to talk about our desire to work together some day.

Q: The clear, cheerful sound matched the imagery perfectly and there were several scenes where the music seemed to be speaking to us when there were very few lines.

That's right. Sakanaction also provides the music for Bakuman and when I went and saw the work at a movie theater their music really resonated with me. They also handle music for the Paris Collection and other areas and it isn't just the usual performance (that they give) as Sakanaction but they're true artists who express with an integral focus on music. I think probably, when my films are categorized in a certain way, Sakanaction won't seem to match that. So I tried (steps for) visual expressions that I don't usually take, like timing the editing more smartly than I usually do or shooting in fast motion and tilting the image upside down as I watched Sakanaction's tempo. It was a very invigorating experience for me to be able to enjoy the expansiveness of expression that I can't bring about on my own.

Q: The fact that you enjoyed making this certainly gets across to us from the imagery.

It was really a lot of fun when we were filming, singing and dancing freely in the middle of Shinjuku. And as to things that (people would say) would be impossible, Sakanaction came to the hall in front of Mikasayama, (a mountain) in Nara, which had been recited in the Manyoshu poems, and they made a song out of their live performance there. It was an extravagant situation that doesn't often happen, and it was a shame that we couldn't show it to anyone.

7.

“Allowing something that you didn’t know to exist in yourself can broaden your own scope.”

8.

A film that can be presented to someone a thousand years from now.

That’s the type of filmmaking that I would like to do.

Q: This work is a story about a woman portrayed by Ms. Sakura Ando who becomes aware of (her) various emotions as she reaches a place where the sun shines. Where is that place where the sun shines, where you would finally like to arrive at, for you?

When I’m asked why I make films, it’s in everything when I say I’d like to tell stories that can be delivered not only to people today but to those a thousand years from now. I think that sense is something that I can feel particularly because I live in Nara where things from a thousand years ago continue to exist in a normal way. Being able to see things from way back in history in today’s modern times... I constantly feel the vastness of the accumulation of those times. There are limits to what a person can do in a lifetime but I’ve realistically experienced that there are also things that can be conveyed to people a thousand years away and I would like to create imagery like that. And Nara is a place that has records of its land so I would like to live here as a human being and be like a vessel that absorbs various things like the earth does and make them exist.

Q: Your unique awareness of beauty must have been developed in your being born and raised in Nara.

For example, there’s a scene at the end of SEED where a ginkgo tree appears with yellow leaves and as a leaf sways and falls to the ground, Ms. Ando turns toward the sun and mumbles “being born” and “beginning”. That leaf scatters away after that, becomes a bud in spring, and adds color to the leaves under the same beautiful sun. That casual period of time slowly becomes accumulated and becomes history. Nara isn’t a place where such beginnings and endings are clearly defined, but it’s a place where things that have continued on forever continues on into the future, where eternal flows can be felt in your bones.

9.

“I wish to be something that can absorb many things around me just like a soil of Nara.”

10.

(caption)

Naomi Kawase

Born in Nara Prefecture. Became the youngest filmmaker in history to receive the Caméra d'Or for *Moe no suzaku* in 1997. Won the Grand Prix at the 2007 Cannes Film Festival for *The Mourning Forest*. She was the first Japanese member to be selected as a part of the main competition jury at the 2013 Cannes Film Festival. She won the Chevalier (Ordre des Arts et des Lettres), a prize for the arts and culture, in 2015. Her latest work *An* has become a smash hit. Currently sold as a BV and DVD. Twitter: @KawaseNAOMI

SEED

Set in Nara and Shinjuku, Tokyo. A girl (played by Sakura Ando) frolics with the wilderness of nature in the middle of her life journey and becomes aware of (her) new emotions as she exchanges things with various people and matters, becomes awakened, and sets forth to look for a place where the sun shines...

11.

“The Story Behind”

SEED and Naomi Kawase as described by Sakura Ando

There were no specific models for the girl in this work so I portrayed her in a neutral state thinking that it would be nice if she could be a living creature that was like one of the clusters of energy in the place we're currently at. In Nara, our first location site, the director had been shooting when I happened to look into the water upside down by chance, saying as she saw me, “Let's try to look at everything upside down from now on.” That became the way the girl viewed things, and it was a strange story where other movements seemed to match that. It's not like I interacted deeply with the director through words but there was a special feeling from the very first stages that made me wonder if I may have visited outer space with her. Feeling as if the director was moving both my body and what's inside my head before I realized it, and a sense that something would be communicated, even if I didn't say anything—those types of feelings had been a lot of fun.